

---

# 鈍感ナイトと守護の花束

アヤタカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鈍感ナイトと守護の花束

### 【Nコード】

N2382U

### 【作者名】

アヤタカ

### 【あらすじ】

ごきげんよう、フランススロイスダールですわ。

花束の一輪の花の私（達）とナイトがラブラブになっていく（はず）の物語ですわ。

他の花だかヒロインも出てくるらしいのですが、彼のパートナーは私で決まりよ！

私と彼は運命的な出会いをするのですから。

そんなナイトこと山田一郎を主人公に花束たる私（ヒロイン達）が事件や戦い、友情に恋愛といった方面にドタバタする話ですわ。

台本がここで終わっているので最後に一言・・・

絶対に見なきゃダメですわよ！

（私の出番は少し先みたいですが・・・）

## プロローグ

### プロローグ

白稜学園はくりょうがくえんの2年B組に在籍中の落ちこぼれたる俺は、誰も残っていない教室で目を覚ました。

2年からの転校生はこの学園では非常に珍しい。

それというのも、この学園にはパートナー制と言うものがあり、一年の頃から同級生とパートナーを結び共に学び成長するという独特の校風があるからだ。

そんな学園に2年から編入してくる者はそうそういないだろう。

ただし、中には上級生とパートナー契約を結ぶ人もいる。

卒業後に新しいパートナーを見つけなければならぬわけだから非常に少なくはある。

その人達の為に学園はパートナーの人数制限を設定していない。

一年の時は1名と限定されているが、卒業生と組んでいた人を考慮に入れ、二年からはその限定数が解除される仕組みになっている。だから編入ができるわけだが、クラスにいた仲間と違い知らない転校生をパートナーにしたがる者はいない。

今組んでいるパートナーとの関係がギスギスしてしまう可能性があるからだ。

試験にしろなんにしろ、文字通り絶対の信頼を寄せられるパートナーが必要な学園なのだ。

この学園には本物のお嬢様やお坊ちゃまが通っており、多くのパートナーを持つのは大抵彼らだ。

そして彼らはこの学園で組んでいたパートナーを執事やメイド、護衛といった形でそのまま雇う場合が多い。

将来の就職活動先にもなる場合があるわけだからよそ者は嫌われる。

だからやっぱり転校生は珍しいし、嫌われる傾向にある。

成績が悪く、運動能力も低い俺こと山田一郎やまだいちろうならば当然だろう。

教師が先日言っていた言葉を思い出す。

「成績もダメ、運動もダメ。今のあなたは執事も護衛も無理。次の試験までにパートナーができれば転校早々で悪いけど退学になるから。」

期日はもう3日しかないのだが、パートナーができる気配は今のところない。

（誰も起こしてすらくれないしな）

外は既に闇が広がっていた。

ふと時計を見る。

時刻は17時5分

そういえば、今日約束があったのだった。

「17時半に商店街で買い物に付き合うこと。いいわね！」

今朝聞いた姉の笑顔と嬉しそうな声が蘇ってくる。

8年振りのこの街への帰郷ともなれば気分も上がるのだろう。

前方不注意と約束の時間(前書き)

プロローグ続き

## 前方不注意と約束の時間

8年前、俺と姉さんはこの街で出会った。

この街に俺がいたのは、ほんの一ヶ月足らずだったのだが。

机の横に掛けてある鞆を手に取ると教室を出ようと手をかける。

商店街まではバス込みで20分でいける距離だからまだ時間に余裕がある。

ドカツ！

「きやつ」

教室の入り口を開くとクラスメイトとぶつかる。

倒れた拍子に大胆なM字開脚を披露してしまったクラスメイトは状況を把握するとトマトなみに赤い顔をし、あたふたと手を振り混乱している。

「ご、ごめん。その・・・大丈夫？」

つい視線が下におりてしまうのを必死に押さえ相手の頭を下げずに謝る。

「い、いえ。はっつ。」

スカートが捲れているのを直すのを忘れていた彼女が慌てて思い出したかのように直し、ペタリと座りこみ見ました？といった表情で涙目ながらに訴えてくる。

気まずくなるのを感じ、回答を避け手を差し出す。

よくよく見るとボサボサ頭の髪をした目が見えない（髪が長いせい）彼女だがメガネをはずし、それなりの格好をすれば可愛いのではないか？などその出るところと出ないところがはっきりしている体系を観察してしまう。

「ありがとう。」

彼女は手を掴み立ち上がるとスカートを叩き埃を払う。

「久遠さん、だったよね？クラス委員長の。急いでいたから注意を怠った。」

「あ、うん。だ、大丈夫だよ。」

段々と尻つぼみに声が小さくなり会話が終了してしまう。

(き、気まずい。)

どうしたものかと考えていると声がかかる。

「あ、あの！」

「お、おう！」

いきなり大声で言われ音量大きめの口調で返事をしてしまう。

ビクリッと彼女は身を震わせ

「やっぱり無理！ご、ごめんなさい！」

といい走り去ってしまう。

去り際に、派手にこけて黒の見た目に合わずアダルトな下着が見えた気がするが、とにかく謝るのはこちらだと思っただが、

完全に見失うまで視線を追っていたが、ふと思いつく。

(今日は委員会の日だったな。委員会って確か……)

ぶるぶるぶる……ぶるぶるぶる……

ピッ

「はい。」

携帯を耳に当てると耳をつんざくような声が響く。

「はい。じゃ、ねー！！どんだけ待たせるきなのかっての！」

キーンとなる耳を保護すべく携帯を耳から遠ざける。

「あんた、今どこにいるのよ？」

そこで腕時計を確認する。

「17時5分？」

(ん？なんか違和感が……)

「あん？誰が時間を聞いてって17時5分だ？」

違和感をやはり感じる。

教室で起きた時刻は17時5分である。

クラスメイトとぶつかって時間を使って17時5分である。

時計が止まっている。

「姉さん今何時？」

「19時だが？」

「・・・」

「・・・」

沈黙。

委員会が終わる時刻は確か19時だった。

久遠さんとぶつかつたのはそのせいだったらしい。

「姉さん。20時まで時計屋つてやっているかなー？」

「知るか！そうそう色々と待っている間に罰を考えていたんだ。

今いるナイトの教室からだど5分でバス停まで行けばバスに間に合うわね。そうすれば19時30分までには私のいるここまで来れる。」

クスリツと嫌な笑いが聞こえる。

（今、ナイトって言ったという事は・・・）

「今の時間なら間に合うな。罰は19時半から5分遅れる事に厳しいのにしよう。そうそう来ないは選択肢にないぞ。来ないとア・レをしちゃうぞ！では、あと3分の健闘を祈る。」

ブチリツと携帯が切れる間際から俺は走り出していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2382u/>

---

鈍感ナイトと守護の花束

2011年10月7日05時21分発行